

青丘文庫研究会 月報 No.259

2012年2月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西部会 (代表・飛田雄一)
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000円
 ※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として 2000円／年をお願いします。

<巻頭エッセイ> シベリア抑留と父 塚崎昌之



誰もが 100 歳以上は生きるだろうと思っていた父が先日、突然に亡くなった。夜中に 1 人で風呂に入り、心臓が止まったのだ。100 歳まで半年を切っていた。連絡を受け、実家のある東京に急ぐ道中で、父が 80 歳を過ぎて書き残していた「軍隊体験記」のコピーを読み返した。

父は 1912 年 4 月、つまり明治 45 年生れ。4か月間だけ明治を生きた。茨城県の裕福な地主の家に生れたが、第一次大戦中の好景気のときに祖父が株に手を出し、戦後恐慌で破産。成績は優秀だったが、辛うじて小学校高等科を卒業すると、東京の炭屋に丁稚奉公に出た。そこで母と出会って、1936 年に結婚、やがて独立し自分の店を持った。子どもも生れて幸せな生活もつかの間、その子どもが急死、そして日中全面戦争の開始で召集令状が来た。しかし、幸いにも国内での 2 年間の軍隊生活で済み、帰宅し、1942 年に二人目の子ども（私の姉）にも恵まれた。ところが、1943 年に再応召、中国に送られた。几帳面な性格を買われたのか、前線ではなく、南京の兵器廠の兵器の出納役になった。「出征」直後に姉が伝染病にかかり、重度身体「障害」者になった。気がかりであったらうが、帰国できるはずもなかった。職務上、中国の各地に出張したが、日本人はどの町でもいい場所に住まい、威張り散らしている様子を目の当たりにした。また、「慰安所」が各地にあり、そこには日本軍兵士がさげすみながらも「利用」していた「朝鮮ピー」がいた。国内にいた時にはわからなかつたが、「大東亜共栄圏」のウソを感じたらしい。

1945 年、母と姉は父の親戚を頼って疎開していたが、3 月の東京大空襲で店も含めて留守宅は全焼した。母は身障者の姉のこともあって、防空訓練や軍事訓練に出ることもままならず、肩身の狭い思いをしながら父の帰りを待っていた。

父は敗戦直前に「満州」の鞍山製鉄所に出張になった。その直後にソ連の侵攻が始まり、南京に帰るべく列車に乗ったものの、山海關で列車は動かなくなり、仕方なく「新京」に引き返し、そこでソ連の捕虜になった。移動途中に仲間を何人も失いながらも、なんとか内陸部のチタの近くの収容所に到着した。収容所先でロシア人兵士の「悪逆」な行為を数多く体験した。例えば、風呂に入れてやると裸にして、金品はもちろん、着古した服でも使えそうなものは全て奪いとられた。しかし、ロシア人個人をあまり恨んでいなかつた。兵士の「悪逆」はロシア人の民族性から生れたものではなく、ソ連社会の貧しさが引き起こしたもので、社会主義体制にも問題はあるが、独ソ戦での国力消耗が最大の原因と見るなど、冷静な筆致で記されている。

栄養失調を患い、故郷、母・姉を思いつつ、死も覚悟したが、一つの部隊から一人だけ帰国できるよう

になり、そのごく限られた幸運を射止めた。ぎりぎり生きて帰れそうな病人と判断されたこと、比較的高齢で妻や子どもがいたことなどの事情を、軍医が複合的に判断して父を指名してくれたのである。途中でも命を失いそうな事件があったが、1947年には何とか帰国して妻子と再会する事ができた。だが、35歳を過ぎてからの再スタートであった。

父は私のしている勉強を励まし、評価してくれ、また、30年前に始めた私たちの事実婚も優しい目で見守ってくれていた。葬儀では孫夫婦（私にとっては姪夫婦）が『異国の丘』を演奏して送ってくれた。戦争体験は次第に遠くなっていく。

第329回在日朝鮮人運動史研究会関西部会（2011年10月9日）

宝塚韓国人小学校について

渡辺さえ



宝塚市は兵庫県南東部に位置し、大阪と神戸市に挟まれた阪神地域にある。現在人口約22万人、面積は約101平方キロメートルで、1954年、武庫川左岸の宝塚町と右岸の武庫郡良元村が一緒になり、その後二つの村を併合して現在に至っている。

朝鮮人と宝塚については鄭鴻永「歌劇の街のもうひとつの歴史 宝塚と朝鮮人」（神戸学生・青年センター出版部、1997年）と近藤とみおさんのホームページ「アンニョン宝塚」等に詳しいが、武庫川改修工事の二期工事が、1923年に第4工区の良元村伊子志（いそし）で終わり、その現場がヨンコバと言われて、在日朝鮮人がつまり、集落を成すようになった。現在この場所には、在日本大韓民国民団兵庫県宝塚支部（以下民団宝塚支部）がある。

ここに、解放後作られた国語講習所を母体として1965年前後まで「宝塚韓国小学校」が存在していた。民団宝塚支部には「宝塚韓国小学校」の事務的書類が400枚近く保管されている。一度捨てられたこともあったようだが、幸い1957年から1962年までのものが断片的ではあるが、残っている。当時の教育現場のようすが窺える貴重な資料である。

資料の中に記載の沿革は、過去を遡っての記録であり、開校または「宝塚韓国小学校」と改称した時期については、書類によって多少のずれがある。同時期に同じ系列の学校としては、教科書配布や本国からの視察の記録の中に、東京韓国学園、大阪金剛学園、大阪白頭学院、京都韓国学園、倉敷韓国学園の名前が見受けられる。

金銭的にひつ迫した状態が続き、教育備品や環境についての窮状がしばしば駐日代表部にも訴えられている。財政難は最後まで解消されることなく、入学する生徒の数が減少し、その解決のために移転の希望を持っていたが、それも果たさず閉校に至った。

1961年度には19名ほどの指導の記録が残っている。教師の備考の記載には「母親の韓国語の使用が多い」「子どもの日本語の発音が良くないのでなおさせる」とあり、また「次の子は日本の学校に入れたい」

「日本の学校で専門性をつけさせたい」という保護者の意向の記載もある。1957年の資料には「父母兄弟や親友の間柄において、母国語を、ことさらに日語を使用する者もあまた有り、民族将来のために痛嘆するものである」とあるが、4年を経たこのころには日本での生活に対応していくという姿勢の変化がうかがえる。このことも韓国小学校閉校に至る大きな理由ではなかつたかと思われる。

「宝塚韓国小学校」の資料整理はまだ始まったばかりで、名称をはじめ、不明なことが多い。一つづつ検証することによって、宝塚という地の発展に貢献した人びとの足跡を辿ることになれば幸いだ。

第330回在日朝鮮人運動史研究会関西部会（2011年12月11日）

林茂澤著「在日韓国青年同盟の歴史—1960年代から80年代まで—」 （在日二世の民族運動とアイデンティティー）（新幹社、2011年） 書評のための覚書

玄 善允



僕は「在日」二世で、主にその「在日」二世について駄文をちまちまと書き続けている。誰かのためになるようにとか、後世に残すためにといった趣旨ではない。自分が気づかなかつたり、気づきながらも無視してきた自分自身やその周囲の現実を、発見もしくは再発見することで、残された人生をよく生きるため、といったもっぱら私的な目的のためである。その際に最も気を付けてきたのは、視野の限界の認識であり、さらには、視野の意識的な限定である。「在日」二世だからと言って、「在日」二世が分かっているわけではないし、自分が体験してきたのは、あくまで「在日」二世全般の一部であり、その一部にすぎないすごく狭い自分の周囲と自分自身のことですら、まともに書くのは難しい。もしもそれが十全にできれば、「在日」について研究したり考えたりする方々にとって、資料的な価値が生じるかもしれないと思うが、それはあくまで副産物に過ぎない。以上を言い換えれば、対象化の努力を徹底することである。自分をあくまで材料として扱い、それを他者が理解できるように書くべく努める。その為には、言葉に対する配慮が必須である。内容の難易度といったこととは全く関係なく、何をさておいても言葉、論理が開かれていなければならない。

以上は実際にそれを達成するのは甚だ難しく、あくまで目標に留まっている。しかし、何かを書き、それを公表するのであれば、その方向での努力が真剣になされねばならない、と僕は真剣に思っている。そんな僕にとっては、本書の出現は驚きだった。僕の人生と一時は触れ合った組織、そして特定の時代に関する書物であるから、それは「ぼくたちの歴史」という側面もある。また、ある現実を生きた人が、それを歴史としてどのように書いているのか、といった興味もあった。それを手掛かりに、僕が着手はしたものの中途で頓挫したままである書き物に対する新たな補助線が見つかるかもと期待もした。だからこそ、その書評をしないかという提案があった時、即座に快諾して本を発注し、実際に手に取ってみたところ、少なからずうろたえた。ショックだった。

僕のように私的な書き物ではなく歴史書を謳っているのだから、上にあげたような原則をそのまま当てはめて論じるわけにはいかず、数々の留保が必要なのだが、少なくとも歴史書を謳うなら最低限守られるべき原則が踏み外されているように思えた。しかも、そこに露呈している（と僕には思える）数多くの重大な瑕疪を知つてか知らずか、それをほめたたえる人がいるようだった。在日の書き物に対して、客観的な批評を施したうえで、著者が十全には描ききれていない問題、あるいは著者が暗黙裡に前提としている論理なり事実認識に浸透している問題を浮かび上がらせるなどを押しとどめる何かがありそうな気配があった。それは極めて危険だと僕は思った。だから僕の本書に対する批判は過度に厳しくならざるを得なかった。

自分が生きた時代・世界を「崇高」、「献身」と著者が本気で思うなら、むしろそうした語彙と論理を捨てて、自分が生きた現実を他者の眼で見て、他者と通底する語彙、論理でもって論ずるべきではないか。当事者が歴史を書く際に備えているはずの利点、それを十分に活用・駆使するためには、語彙、事実認識、資料の扱い、分析、論理といったすべてのレベルで、自己の体験・心情から身を離す努力が是非とも必要だろうし、その書物を取り巻く読者たちもまた、生きられた経験やそれを叙述するために払われた数々の労苦に対する敬意はそれとして、あくまでテクストとして向き合い、一見無責任と思われかねないような自由な議論をなすべきではないか。それこそがテクストと著者に対する礼儀であり、その成果を真に活かす道ではなかろうか。

研究会で配布した資料を必要とされる方は、sunyoonhyun@yahoo.co.jpまで連絡してください。

ブックレットの通信販売です。いずれも定価+送料(80円)を切手で、〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1
神戸学生青年センターまでお送りください。

-
- ①竹内康人編著『朝鮮人強制労働企業 現在名一覧』(2012年2月、A4、24頁、240円)
- ②宮内陽子『生徒と学ぶ戦争と平和』(2011.12、A4、77頁、560円)
- ③成川順『南京事件フォト紀行』(2011.12、A4、88頁、560円)
- ④NGO 神戸外国人救援ネット『阪神淡路大震災と外国人<新聞資料集>』(2011.5、54頁、400円)
- ⑤『2011年韓日合同学術セミナーレジメ集』(2011.8、A4、104頁、560円)
- ⑥信長正義『東学農民革命の遺跡地を訪ねて』(2010.9、A4、40頁、400円)
- ⑦神戸・南京をむすぶ会『南京・海南島フィールドワーク記録集』(2011.12、A4、72頁、480円)
- ⑧むくげの会『むくげ愛唱歌集』(1985.6、2011.8再刊、A4、120頁、800円)
- ⑨むくげの会『むくげ通信250号』(2012.1、A4、36頁、180円)
- ⑩『強制労働員真相究明ネットワーク・研究集会・資料集』(2011.5、A4、88頁、560円)

●青丘文庫研究会のご案内●

■第282回朝鮮近現代史研究会

2月12日（日）午後3時～5時

「ポツダム宣言と日本政府の対応～朝鮮分断との関連で～」

李景珉

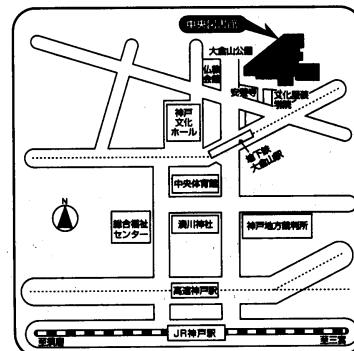
■第332回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

2月12日（日）午後1時～3時

「解放後の民族教育と教科書

—プランゲ文庫所蔵の史料をめぐって— 池貞姫

※会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



【今後の研究会の予定】

3月11日（日）在日（宇野田尚哉）、近現代史（未定）、4月は、8日（日）または15日（日）です。
在日（露口みさき）、近現代史（未定）。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

3月号は、堀内稔、4月号以降は、水野直樹、川口祥子、鈴木常勝、宇野田尚哉、斎藤正樹、本岡拓哉、高野昭雄、李景珉、李裕淑、小野容照、梶居佳広、中川健一、黒川伊織、砂上昌一、三宅美千子、佐野通夫、吉川絢子、安致源、伊地知紀子、太田修、高正子、坂本悠一、全淑美、足立龍枝、渡辺さえ、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允。よろしくお願ひします。締切は前月の10日です。

【編集後記】

■12月号と1月号の月報は、お休みしました。と、ということで、あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひします。■先日、零下9度の六甲YMC Aで会議をしたら、風邪をひいてしまいました。みなさん、気をつけませよう。（飛田、hida@ksyc.jp）